

銀幕の函館。

函館はこれまで幾多の名作の舞台となってきた。

この街だからこそ生まれた情景があり、この街だからこそ紡がれたドラマがある。

異国情緒あふれる街並み、海と坂が織りなす美しい眺望、港町を彩るきらめく灯り——。

スクリーンに焼き付けられた景色は、上映が終わったあとも色褪せることなく、

人々の心に深く刻まれている。

その光景に宿る記憶は、作品と現実をつなぎ、訪れる人を物語の続きへと誘う。

そこには映画を愛する人にも、函館を愛する人にも、新たな出会いと感動が待っている。

幕が上がる。——さあ、旅の始まりだ。

はこだてフィルムコミッション

『はこだてフィルムコミッション』は、函館市における映画・ドラマ・CMなどのロケ誘致と撮影支援を行い、観光振興や地域活性化につなげることを目的とした団体です。本誌はオフィシャルサイトのコンテンツの一つで、映画で使用されたロケ地を紹介する「ロケ地マップ」と連動。QRコードを読み込むと、作品情報やオンライン地図など詳細を閲覧できます。携帯電話と本誌を持って、ロケ地巡りをお楽しみください。

はこだてフィルムコミッション
オフィシャルサイトはこちら



www.hakodate-fc.com



そのみにて光輝く

『シネマアイリス』館主の菅原和博さん (P42) が企画・製作した、2014 (平成26) 年公開『そのみにて光輝く』(P24)。函館市出身の作家・佐藤泰志さんの原作を映画化した、2010 (平成22) 年『海炭市叙景』(P28)、2016 (平成28) 年公開『オーバー・フェンス』と並び「函館3部作」と位置づけられる。

©2014 佐藤泰志/
「そのみにて光輝く」製作委員会



きみの鳥はうたえる

2018（平成30）年公開『きみの鳥はうたえる』（P18）は、『シネマアイリス』（P42）が開館20周年記念作品として企画・製作。オール函館ロケで撮影され、市民がキャストやエキストラとして出演、撮影時の炊き出し、ロケハンの情報提供などを支援した。

©HAKODATE CINEMA IRIS

03

草の響き

2021

心に失調をきたし、妻とふたりで故郷函館へ戻ってきた和雄。病院の精神科を訪れた彼は、医師に勧められるまま、治療のため街を走り始める。雨の日も、真夏の日も、ひたすら同じ道を走り、記録をつける。そのくりかえしのなかで、和雄の心はやがて平穏を見出していく。 そんななか、彼は路上で出会った若者たちとふしぎな交流を持ち始めるが――。



草の響き

監督：斎藤久志

出演：東出昌大／奈緒／大東駿介／Kaya／林裕太／三根有美

草の響き DVD情報：価格／4,290円(税込)

発売・販売元：Happinet

© 2021 HAKODATE CINEMA IRIS

ロケ地巡り
散策ルートの
詳細はこちら



ロケ地MAP

ロケ地巡り散策ルート

1 緑の島

函館市大町15

2 外国人墓地付近の道

船見町25

3 函館山ロープウェイ

函館市元町19-7

4 ともえ大橋

函館市若松町12

5 立待岬

函館市住吉町9-9

6 函館市民プール

函館市千代台町22-25

7 根崎公園

函館市湯川町3-6



立待岬

津軽海峡に面し、周りを海で囲まれた断崖絶壁の景色を楽しめる岬。彰は、同級生達から、ここの大岩から海に飛び込むよう挑発される。

06

きみの鳥はうたえる

2018

函館郊外の書店で働く“僕”、一緒に暮らす失業中の静雄、“僕”の同僚である佐和子の3人は、夜通し酒を飲み、踊り、笑い合う。微妙なバランスの中で成り立つ彼らの幸せな日々は、いつも終わりの予感とともにあった…。

ロケ地巡り散策ルート

1 箱館元町珈琲

函館市元町31-11

2 ともえ大橋

函館市若松町

3 杉の子

函館市松風町8-5

4 赤帽子屋

函館市松風町11-3

5 ハセガワストア千代台店

函館市千代台町11-5

6 グルマンカンタ

函館市梁川町10-24

7 シネマアイリス

函館市本町32-13



ともえ大橋

橋の上からは、函館湾や青函連絡船記念館周丸などが一望できるスポットとなっている。



きみの鳥はうたえる

監督：三宅唱

出演：柄本佑／石橋静河／染谷将太／足立智充／渡辺真起子／萩原聖人 他

きみの鳥はうたえる DVD情報：価格／4,180円(税込)

発売・販売元：TCエンタテインメント

©HAKODATE CINEMA IRIS

ロケ地巡り
散策ルートの
詳細はこちら



ロケ地MAP

08

そのみにて光輝く

2014

ある出来事がきっかけに仕事を辞め、目的もなく毎日過ごしていた佐藤達夫は、ある日パチンコ屋で使い捨てライターをあげたことをきっかけに、粗暴だが人なつこい青年・大城拓児と知り合う。拓児に誘われるままについていくと、そこは取り残されたように存在している一軒のバラックだった。そこで達夫は拓児の姉・千夏と出会う。互いに心惹かれ、二人は距離を縮めていくが、千夏は家族を支えるため、達夫の想像以上に過酷な日常を生きていた。それでも、千夏への一途な愛を貫こうとする達夫。達夫のまっすぐな想いに揺れ動かされる千夏。千夏の魂にふれたことから、達夫の現実が静かに色づきはじめ、達夫は失いかけていたこの世界への希求を取り戻していく。そんなとき、ある事件が起こる。



そのみにて光輝く

監督：呉 美保

出演：綾野 剛／池脇千鶴／菅田将暉／高橋和也／火野正平／伊佐山ひろ子／田村泰二郎 他

そのみにて光輝く 参考価格：DVD通常版／3,800円(税別)、DVD豪華版／4,800円(税別)、Blu-ray豪華版／5,800円(税別)
発売・販売元：TCエンタテインメント

©2014 佐藤泰志／「そのみにて光輝く」製作委員会

ロケ地巡り散策ルート

1 穴澗海岸

函館市入舟町

2 山上大神宮

函館市船見町15-1

3 十字街

函館市末広町8

4 津軽屋食堂

函館市松風町7-6

5 本町

函館市本町1

6 函館競輪場

函館市金堀町10-8

ロケ地巡り
散策ルートの
詳細はこちら



ロケ地MAP



十字街

ある事件を起こした拓児が、達夫の自転車の後ろに乗せられ、交番へ出頭するシーンが撮影された。



函館競輪場

拓児が競輪場で車券を買うシーンや、造園会社社長・中島とレースを観覧するシーンなどが撮影された。

09

海炭市叙景

2010

両側に海に挟まれた街・海炭市。幼いころに両親を失いながらもひっそりと身を寄せるように暮らす兄妹。立ち退きを迫られながらも、頑なに家を持ちようとする老婆。バラバラになってしまった家族の中で葛藤する男…。海炭市という架空の地方都市において、複雑な感情を抱えながらも必死に生きる様々な人間模様が描かれた一作。

ロケ地巡り散策ルート

1 函館朝市

函館市若松町9-19

2 十字街電停

函館市末広町

3 住吉漁港

函館市青柳町

4 函館市公民館

函館市青柳町12-17

5 函館山

函館市函館山



住吉漁港

主人公たちがすれ違って行くシーンで路面電車が停車する電停。隆三と春代、晴夫とアキラが乗車していた。



海炭市叙景

監督：熊切和嘉

出演：加瀬亮／小林薫／南果歩／谷村美月 他

「海炭市叙景」DVD参考価格：3,990円(税込)

販売元：ビデオメーカー

©2010 佐藤泰志／映画「海炭市叙景」製作委員会

ロケ地巡り
散策ルートの
詳細はこちら



ロケ地MAP

地元作家の短編に心を揺さぶられ
5本の映画をプロデュース。
函館市民映画館の館主が語る、
「見せること」と「つくること」。

INTERVIEW

菅原和博

シネマアイリス

KAZUHIRO SUGAWARA

1956（昭和31）年、旭川市生まれ。中学2年のときに函館へ移住。20代から映画の自主上映会を開催し、1996（平成8）年に有志たちと市民映画館『シネマアイリス』を開業する。その傍ら今年で40周年となる喫茶店『水花月茶寮』を経営。

一人の映画ファンが、仲間と自主上映会を重ね、多くの市民のキャンパを集めて市民映画館をつくり、その支配人となる。さらに函館出身の作家・佐藤泰志の小説を原作に、函館を舞台とした映画を製作する——。これが、函館市民映画館『シネマアイリス』の支配人・菅原和博さんの映画人として歩んできた、およそ60年の軌跡だ。しかし本人いわく、スタンスは一貫して変わらない。「昔もいまも、思うことは“いい映画が観たい”。ただそれだけなんです」。

菅原さんは函館の高校卒業後、東京で7年間暮らしたのち故郷に戻り、実姉とともに末



広町で喫茶店『キャッツ・クレードル』を開業した。「お客さんが少なくて暇を持て余してたから、店で映画の自主上映をやろうかなと考えたんです」。菅原さんは当時気鋭の映画監督・長崎俊一さんのインディペンデント作品を函館に呼び寄せ、自身の喫茶店で最初の上映会を開催。これをきっかけに、喫茶店の常連客で生粋の映画ファンたちとグループを結成し、“函館の劇場では観られない映画を、自分たちの力で上映する”ことを目的とした団体「アイリス・イン」が誕生した。

1983（昭和58）年以降は、公民館やライ



ブハウスなど会場を移しながら、当時ミニシアターや名画座がなかった函館では観られない名作群を上映。ちょうどそのタイミングで、函館駅前の大門地区にミニシアター系映画館『巴座トムホール』（松風町）が誕生し、ここで初となる劇場上映会を開催。時は1980年代なかば。全国的なミニシアターブームの波も追い風となり、「アイリス・イン」の活動は本格的に軌道に乗った。

1993（平成5）年。『巴座トムホール』が閉館する際に主催した最終上映祭において、5日間日替わりでミニシアター系の話題作を

5本上映。およそ1000人の観客を動員したことで、大きな手応えをつかんだ「アイリス・イン」は、さらなる有志を募り“函館に新しい映画館をつくろう”をスローガンに一大キャンペーンを展開。多くの市民からの賛同と約470人からの寄付が寄せられ、“自分たちが観たい映画と、市民に観せたい映画を提供する”という菅原さんにとっては夢のような映画館『シネマアイリス』が誕生した。

そして時は流れて2026（令和8）年5月、『シネマアイリス』は開館30周年を迎えた。良いことも、そうでないことも、30年におよ

「いい映画が観たい。ただそれだけなんです」

ふ歩みの中で予想外のことはたくさん起きた。中でも、菅原さんにとってもっとも想像を超えた出来事は、“映画をつくる立場”になったことかもしれない。ときは2007（平成19）年の秋。「その頃、北海道新聞に短編集『佐藤泰志作品集』の書評が載っていたんです。評論家の川本三郎が書いてたんですけど、その本を絶賛していて気にはなっていたんですよ。ちょうど同じタイミングで劇場のスタッフからその本をプレゼントしてもらって、分厚い本だったんですけど、冒頭に収められていた「海炭市叙景」に引き込まれ、夢中になって一晩のうちに読み切ってしまった、これが本当に素晴らしくてね。これこそ映画として観たい作品だし、函館で撮るべきだと思って。映画魂に火をつけられた思いでした」。かつて8ミリの自主映画をつくったことはあったが、仲間と自主上映会を繰り返してきたときも、劇場の支配人になってからも、「自分で映画をつくりたい」と思ったこ

とは一度もなかった。しかし、このときだけは、その衝動を抑えられなかった。

1949（昭和24）年、函館市に生まれた佐藤泰志は函館西高校に入学して文芸部に所属。高校時代に書いた小説『市街戦の中のジャズメン』は第5回青島青少年文芸賞優秀賞を受賞し、早くから将来を嘱望された。その後、作家となり5度の芥川賞候補や三島由紀夫賞候補に挙げられながらも、ついに一度も受賞できないまま41歳のときに自死を選んだ。没後十数年を経た2000年代に入ると再評価の機運が高まり、彼の作品が次々と復刊されたことがきっかけとなり、やがてそれまで佐藤泰志作品に触れたことのなかった菅原さんのもとに届くことになる。

佐藤泰志の短編作品『海炭市叙景』の映画化に向けて動き出した菅原さんの背中を押したのは、『シネマアイリス』開館前と同じように、多くの函館市民だった。「1年間にわたって製作資金の寄付を募って、最終的に1千万

円ほどが集まりました。それだけでなく、私がこの小説に出会う以前から、函館でフォーラムや勉強会を開き続けてきた佐藤泰志ファンの方々の協力や、市民から寄せられた物資の提供など、本当に大勢の方々の支援があって実現にこぎ着けたんです。菅原さんがプロデューサーとして深く関わり、2010（平成22）年に完成した映画『海炭市叙景』は国内外で高い評価を得て、これを皮切りに約10年間で佐藤泰志の原作5作品を映画化してきた。

現在も公開されている『海炭市叙景』の公式サイトには、制作の目的と意義について明記されており、その中には「今の函館の町並みを映像として記録し、後世への記憶に残す。」という一文がある。『海炭市叙景』での函館とつづくゴライアスクレーン、『そのみにて光輝く』での函館駅前・大門地区の飲み屋街、『オーバー・フェンス』での旧高盛小学校グラウンドなど、この10年の間に姿を消した函館の景色は、その宣言通り、フィ

ルムに刻まれた。『きみの鳥はうたえる』での夜明けの五稜郭市街地やハセガワストア駐車場、『草の響き』での根崎公園グラウンドなど、函館市民が日々目にしている何気ない風景もまたしかりだ。「この5作品を通して印象深いロケ地やシーンは、もう数え切れない。しかし、何気ない路地や公園も含めて、“そのときの函館”を映画の中に刻めたのは私自身にとっても何より嬉しいことでした。映像遺産といったらず少し大袈裟かもしれないけれど、あの時代の函館の風景を映像として記録できたという意味では、文化的にも意義のある仕事だったと思っています」。

『シネマアイリス』誕生から30周年。菅原さんは現在、6作目となる佐藤泰志原作の新作映画の準備に追われている。

函館市民映画館 シネマアイリス

㊤ 函館市本町22-11 グリーンエステート1F
☎ 0138-31-6761 ㊤ 無休
URL: www.cinemairis.com

函館出身の作家・佐藤泰志の原作を オール函館ロケにこだわり映画化



海炭市叙景
2010
©2010佐藤泰志／
「海炭市叙景」製作委員会

佐藤泰志の故郷・函館をモデルにした“海炭市”を舞台に、造船所をリストラされた兄妹、立ち退きを拒否する老婆、妻の裏切られた中年男、息子との関係に悩む運転士などを主人公に、地方都市の疲弊と人々の再生を繊細なタッチで描く。熊切和嘉監督作品。



そのみにて光輝く
2014
©2014 佐藤泰志／
「そのみにて光輝く」製作委員会

綾野剛、池田千鶴、菅田将暉らが共演し、人生への希望と再生のきっかけを求めてもがく若者たちを鮮烈に描き、第88回キネマ旬報日本映画ベストテン第1位、第38回モントリオール世界映画祭 最優秀監督賞受賞など、各方面から絶賛された傑作。呉美保監督作品。



オーバー・フェンス
2016
©2016「オーバー・フェンス」製作委員会

原作者の佐藤が職業訓練校に通っていた体験をベースに、それぞれに苦悩を抱える孤独な男女の恋模様を綴る。オダギリジョーと蒼井優の好演に加え、新緑の函館で撮られたシーンはどれも印象深く、物語も前向きなためファンが多い1本。山下敦弘監督作品。



きみの鳥はうたえる
2018
©HAKODATE CINEMA IRIS

佐藤泰志のファンの間では「初期の最高傑作」といわれる小説を原作とし、3人の若者による幸福でありながら刹那的な“一瞬の夏”を切り取る青春映画。柄本佑、染谷将太、石橋静河のリアルな演技はまるでドキュメンタリーを見ているかのよう。三宅唱監督作品。



草の響き
2021
©2021 HAKODATE CINEMA IRIS

原作は、佐藤自身が自律神経失調症を患い、療法として始めたランニングの経験をもとに書いた短編小説。心を病んで走ることに没頭する主人公を演じるのは東出昌大。メインのロケ地に選ばれた根崎公園グラウンドの景色が鮮明に残る。斎藤久志監督作品。

INTERVIEW

寿大 聡

俳優・監督・プロデューサー

函館を訪れたのは実に23年ぶりという寿大聡さん。かつて俳優の登竜門である、仲代達矢さん主催の『無名塾』に所属していた頃、毎年の全国巡業で訪れたのが最初だった。「22、23歳の頃に、函館から札幌、釧路と道内をまわったんです。当時は半年で全国約150ステージをこなす日々。芝居を終えたらすぐに次の街へ移動で、観光はほとんどできませんでした。ただ、函館で朝市へ寄れたのは今も印象に残っています」。寿大さんと北海道との縁は、その後も続いた。「2021（令和3）年に『廃墟に乞う』という舞台を、俳優の加藤雅也さんと一緒に制作し、札幌で上演させていただきました。翌年には『宝島』という舞台も上演したりと、北海道とのご縁は今も続いています」

役所広司さんに憧れて役者を目指した寿大さん。幼少期から映画は身近な存在だった。「母がアル・パチーノの大ファンで、我が家ではテレビをほとんどつけずに、ビデオテープがいつも流れていたんです。『ゴッドファーザー』や『スカーフェイス』、『カリートの道』なんて、子どもには内容がわからないんですけど。母も何度も観ているから、家事をしながらBGMのように流しているのが日常でした」。寿大さんは映画館という空間、そして映画が持つ力について言葉を続ける。「映画は人生や考え方に新たなエッセンスを与え、

俳優、映画監督、プロデューサーとして幅広く活躍する寿大聡さん。

今回、函館を訪れた寿大さんに、これまでの活動や映画にける情熱、そして北海道との縁について聞いた。

心の豊かさをもたらしてくれる力があります。最近自宅映画を楽しむ方も増えていますが、映画館で観る体験はまったく別物。大きなスクリーンで観るからこそ、監督の細かな演出や役者の繊細な表現までもが伝わってくる。同じ作品でも、家で観るのは物語そのものが違って感じられるはずです」

好きな作品の一つは、役所さん主演の『Shall we ダンス?』。「笑って、泣けて、感動して、完璧な作品です。世代も価値観も超えて『面白い』と思わせるのはすごいですよね」。役所さんが『無名塾』の出身だと知った寿大さんは、同塾への入塾を決意。「『無名塾』は、仲代さんがマンツーマンで教えてくださる養成所で、『外で10年修行する分を3年で教える』というコンセプトがあるんです。自分は大人になってからの挑戦だったので、逆に『ここでしか間に合わない、そうでなければプロにはなれない』という思いで門を叩きました」。厳しい修行期間で得た教えは、今も寿大さんの礎となっている。「役者は一生修行であること。常に人間というものを研究し、感動の記憶や肌の感覚を、意識的に日々を過ごすことでストックしておかなければならない。それを求められた瞬間すぐ再現できればプロではありません。役作りについても、仲代さんは『なりきるなんてことはあり得ない、演じなければいけない』と

「映画は人生や考え方に新たなエッセンスを与え、心の豊かさをもたらしてくれる力があります。」



仰っていました。芸術とは“芸”と“術”で成り立っている。単なる感性だけではなく、芸として人へ伝えるための“技術”を常に研鑽を積み重ねなければならない。その教えは今も胸に深く刻まれています」

近年は役者にとどまらず、映画監督やプロデューサーとしても活動の幅を広げている。「役者は作品の一端を担う存在ですが、プロデューサーはゼロからすべてを作らなければなりません。作品と向き合う時間は何百倍も違いますし、その分やりがいも大きい。やは

り大変なのは資金面ですね。経営者としての大きな責任が伴います」。2021（令和3）年に自身の制作会社を立ち上げた背景には、役者として100作品以上に携わる中で“自分自身の足跡が残せていない”という焦燥感、そして果たすべき“使命”があった。「私の祖父が乗船していた学童疎開船『対馬丸』の話を、どうしても映画にしたいとずっと考え続けていました。でも、今の環境のままでできない。悩んで加藤雅也さんへ相談したところ、『自分の使命を全うした方がいい』と背中を

押してくださったんです」

企画自体は20年以上前から動いていたものの、実現までの道のりは険しかった。その心を支え続けたのは、仲代さんの言葉だった。「仲代さんが『我々表現者が、戦争をテーマにした作品に積極的に関わることは義務だ。メリットやデメリットではなく、悲惨な過去を風化させないために発信し続けることが、俳優としてできる社会貢献なんだ』と仰っていました。だからこそ、自分の祖父の『対馬丸』の話は絶対に形にしなければと思ったん

です」。その後も企画をテレビ局や制作会社へ持ち込んでは不採用が続いた。「それならば自分で作るしかない」と資金調達を始めましたが、当然簡単には集まりません。その間に祖父も亡くなり、半ば諦めかけていたときに、趣旨に共感してくださる出資者の方と奇跡的な出会いを果たしたんです。それから制作に3年の歳月をかけて、昨年ようやく実を結びました」。ドキュメンタリー映画『満天の星』は2025（令和7）年に全国公開され、文部科学省選定作品にも選ばれた。「上映後、沖縄の方々から『この対馬丸の話を世界に発信してくれてありがとう』という声をいただきました。作らなければならないという思いだけで完成させた作品でしたが、感謝までしてもらえて本当に感動しました。祖父は完成を見ることなく亡くなってしまいましたが、見えない力で後押ししてくれたような気がしています」

寿大さんは現在、新作づくりに力を注いでいる。「北海道を舞台にした小説の映画化に取り組んでいて、全編を道内で撮影しました。編集や音楽制作など、やるべきことはまだ山積みです。成功に向けて、とにかく頑張るしかありません」。映画制作に情熱を燃やし、自らの手で道を切り拓いていく寿大さん。北海道という舞台から生まれる新たな作品への期待は高まるばかりだ。

SATOSHI JUDAI

1981（昭和56）年、埼玉県生まれ。大学在学中に教員免許を取得するも、俳優・仲代達矢氏が主宰する名門『無名塾』に入塾。以後、舞台・映画・テレビなど100本以上の作品に出演し、主演舞台も多数務める。2021（令和3）年には自身の制作会社を設立し、監督・プロデューサーとしても活動を開始。表現の幅を広げている。



「芸術とは“芸”と“術”で成り立っている。仲代さんの教えは今も胸に深く刻まれています。」